

**第4回（仮称）堺ミュージアム基本構想検討懇話会
議事録**

1. 日時 令和7年12月16日（火） 10時00分～12時00分
2. 場所 堺市役所本館3階大会議室第3会議室
3. 出席 構成員7名
藪田貫構成員（座長）、藤野一夫構成員（座長代理）和泉大樹構成員、
大澤研一構成員、國賀由美子構成員、佐藤郁子構成員、稲葉信子構成員（web参加）
4. 傍聴者 10名
5. 会議次第
 - 開会
 - 議事
（仮称）堺ミュージアム基本構想（案）作成について
 - (1)第3回（仮称）堺ミュージアム基本構想検討懇話会の振り返り
 - (2)（仮称）堺ミュージアム（案）全体の確認

6. 議事等の内容

- (1) 第3回（仮称）堺ミュージアム基本構想検討懇話会の振り返り
（事務局）資料1「基本理念－活動方針－想定する取組 相互の関係」説明

（藪田）基本理念、活動方針、想定する取組の3階層に整理された。まず、基本理念、活動方針の整理について、議論をしていただきたい。

（藤野）基本理念5「社会課題と向き合う場であること」で、「環境問題、社会的な責任、ガバナンスの観点から持続可能な博物館経営を実現する」を入れていただいたのは、とても素晴らしいことだと思う。また「インクルーシブな教育・普及・連携」と「向き合うべき現代的課題」を分けて重要な観点として挙げていただけたというのも、すごく大きな進歩だと思っている。若干気になる箇所として「向き合うべき現代的課題」の④多様な文化的背景に配慮したわかりやすい展示、というのはどのようなことを想定しているのかこの文章だけだとわかりにくい。また、⑤として、これまでやっていなかった「博物館評価制度」を挙げているが、これからの時代、評価というのはかなり厳しく求めら

れてくるので、これについて一本立てたのもすごく素晴らしいことだと思う。

④多様な文化的背景に配慮するという点に関して、私自身ヨーロッパのミュージアムに行くことが多く、そこで気づいたことを踏まえて少しお話をしたい。この博物館は基礎自治体のミュージアムで、ナショナルミュージアムとは違うので、そこまで事を荒立てる必要はないと思うが、ヨーロッパのミュージアムでは 2000 年代に入ってからポスト・コロニアルやデ・コロニアル問題が大きな問題として取り上げられてきた。どのミュージアムもポスト・コロニアル状況への認識について非常に自覚的になってきており、自分たちが持っているコレクション等のいわゆる脱植民地化（コロニゼーション）に積極的、具体的に取り組んできたということを実感してきた。そのため、新しいミュージアムをつくる時は、この問題と無関係では絶対にいられない。ポスト・コロニアル状況をどう認識し、脱植民地化というものとどう結んでいくのか、既存のコレクションはもとより、今後コレクションを収集するとして、どういうコンセプトに基づいてどういう価値観で行うのか、基礎自治体の博物館だからといって、この問題と無縁であることはできないのではないかと。グローバルイシューとして多様な文化的背景、具体的にはグローバル・サウスの問題、気候変動の問題、ジェンダーの問題、インクルーシブな問題も重要となってきた。

④多様な文化的背景に配慮と関連すると、文化多様性と生物多様性、この問題と今後どう向き合っていくのかということが、既に持っているコレクションをどういうふうに展示したり活用したりするのかということとも関わってくる。さらに将来に向けた計画的な収集、収集の計画性というのは何らかの価値観あるいはイデオロギーに基づいて行うため、ポスト・コロニアル、デ・コロニアルの問題、あるいはグローバル・サウスや気候変動、文化多様性、生物多様性というようなこととかなり深く関連する問題だと思う。

したがって「向き合うべき現代的課題」の 6 番目として、ポスト・コロニアル状況について認識し、コレクション等の脱植民地化に積極的に取り組むような一文を入れておく必要があるのではないかと。残念ながら日本は本格的な植民地主義の国だったにもかかわらず、過去の反省というのが深く行われていないため、この問題が頭の中から抜けてしまっているが、10 年先にこの博物館ができるのであれば日本もそういった世界の厳しい植民地に対する見方から逃れることはできないと思うので、今言ったような問題が議論できる機会を設ける 1 項を入れておくべきだと思う。

(大澤) まず階層構造について、非常にすっきりとまとまったのかなと感じた。基本的にこの形で進めていただいて大丈夫ではないかと思う。

細かい話だが、基本理念 5 について 1 つ話をしたいのは、活動方針(11)に「社会状況、経済状況の変化に対応した博物館運営を展開する」というような表現で入れていただいたのは、非常に素晴らしいことと思っている。この活動方針に対応するのは「向き合うべき現代的課題」の⑤ということになっているかと思うが、この(11)の持つ意味合いというのは、かなり重いものが含まれているのではないかと感じる。さらに想定する取組の中で、これをブレイクダウンするような形で表現するとすれば、⑤だけでは足りないというか、もう少し踏み込んだ具体的な項目があってもいいのかなと。この(11)

との関係として今あがっているのは「博物館評価制度の導入」ということになっているが、私はこれからの博物館運営は、先をどう読んでいくかというところが大きく問われると思う。今回の（仮称）堺ミュージアムも、当然のことながら、できたらお終いではなく、できてからどうするのかというところが非常に重要になってくる。そういう意味で長期的な計画というのを、常につくっては見直す、つくっては見直すということを経営的にやっていくのが重要になってくると思う。それによって博物館評価というのも成り立つと思うので、ぜひ計画的な、中長期計画というものも、向き合うべき現代的課題の中に盛り込んでいただきたいと思います。社会状況・経済状況の変化に対応したということであれば、その関係で長期的な計画というものも持っていないと、具体的な対応が実際にやりにくくなってきているので、その辺のところはぜひ、文言的なことも含めて追加をご検討いただけたらと思う。

（佐藤）2点お尋ねしたい。基本理念4の「安心安全な環境整備」の②にセンサリーフレンドリーを入れているが、バリアフリーの中にセンサリーフレンドリーも含まれるので、なぜ特出しになっているのか違和感がある。ここには入れず、この後の具体的な施設・設備というところで「センサリーフレンドリーも配慮した設備機能が必要である」ということを記述したらいいかと思う。

もう一つ、基本理念2の「効果的な情報発信」のところに、SNS やデジタルアーカイブなどデジタルの手法の話だけが書かれている。この基本構想は実現するのが多分5年以上先、それ以降のことになるかと思うので、その時点でSNS というのが効果的な手段として残っているかどうかというのはわからない。したがって、例えば、「デジタルなどその時代時代の受け手に一番届きやすい技術を活用する」のように、デジタル活用について一つにまとめられてはどうか。重要なのは手段というよりむしろ何を発信するかということかと思うので。ここで謳われている堺のブランド力の発信ということであると、例えば展示を見た後こういふところに行くとか理解が深まるなど周辺情報を含めた発信をされているところが多いが、ここで一番重要なのは歴史資源だと思う。展示以外の歴史資源に何があるのか、あるいはこのミュージアム活動を支えている市民の普段の文化財活動みたいなものを全部含めて、堺のブランドに資する重要な要素であり、そういう文化的なリッチさみたいなものを発信するんだということ、ここに是非入れていただけたらと思う。

（國賀）基本理念1で、「計画的な収集」の1番に「収集方針に基づく収集」が書かれていて、これはもちろん当然のことだと思うが、収集方針にミュシャのことをしっかり入れる考えなのか、また収集方針の検討を既に深められているのであれば、ミュシャのことをはじめ、なるべく早くそれを明らかにしていただきたい。

基本理念2の「積極的な資料の活用」の⑤に「グッズ作成など収蔵品を活用した収益化」とある。収益化についてはもちろん理解できるが、ICOMでの博物館の定義は、ちょっと意味の取り方が難しいところがあると思うが、収益が出てはいけないと解釈できる文言が入っているため、「収益化」という言葉までは入れずに、「グッズ作成などの収蔵品の活用」でとどめ、収蔵品の活用により広く一

般の方にも博物館について知っていただく機会とする、そういう発想のものとグッズ作成であり、「収益化」という言葉は控えた方がいいのではないか。

それから基本理念4「モノにもヒトにも安全安心な場であること」ということで、(9)でモノ、(10)でヒトと分けて、モノは保管・保全を念頭において考え、ヒトはおそらく展示室での鑑賞という発想で分けていると思うが、モノとヒトの安全は一体化して考えなければいけない面があると思う。モノは保管・保全だけでなくもちろん展示をするわけで、収蔵庫から展示室に持っていき、それから収蔵品は他所に貸し出すということも当然ある。広い意味でモノもヒトも動くという想定のもと安全安心を考えていく必要があり、この分けている部分に加えて一体化した部分で、モノとヒトの動線を分けることが鉄則になってくると思うが、2つに分けるだけでは考え方として不十分な部分があるのではないか。

あと、基本理念5の「向き合うべき現代的課題」について、先ほど藤野先生がおっしゃったことと関連してくるかもしれないが、①でインクルーシブと謳われ、②でジェンダーという性差に特化した表現があり、④で多様な文化的背景という非常に抽象的な話となり、具体性と抽象性が①、②、④で織り混ざっているような感じがしたので、少し表現を考えたほうがいいと思う。

(和泉) まず、これまでも議論を行って、事務局の方でその都度、こちらの意見等を受け止めて消化していただいているというのも頭が下がる。この3つの階層構成についてはすごく見やすく、私もスッと理解することができた。「想定する取組」と名前を変えられて、小さな箱で示されているが、ここにも、収集、保管、現地調査、研究、博物館活動の基本的なところが盛り込まれている、支えているというところがよくわかって、大変評価する。あと基本理念1の想定する取組で調査研究が真ん中に入っている、これは本当に個人的な話だが大変良いなと感じている。

また基本理念5のところは、大澤構成員がご指摘されたとおり、活動方針(11)が少し気になった。この4回の議論の中で、私も組織とか人員の話をししたが、博物館運営としてまとめて表現しているところで、この(11)が追加されたのが良かったかなと思う。

全体として、平らになったようなイメージ。良い悪いという意味ではないが、これまでの議論で、例えば観光とか国際都市というような、エッジを立てると言うか、堺らしさの追求と言うか、そういうところがあがっていたと思う。そのあたりは文言にはもちろん入っていると思うが、全体を讀んでみるとわりと穏やかにまとまったかなというイメージ。それが良いのか悪いのかとか、修正してほしいとか、そういう意見ではないが、少しだけ物足りなさというかそういう気持ちがあるのも事実。修正を求めているわけではない。

(稲葉) 今まで皆さんから出たコメントについて。エッジがきいていないということについてだが、キーワードである基本理念の5つが前面に出てこないというエッジはきかないだろう。資料2の中身を変える必要はないが、一般向けにポンチ絵のようなもの、キーワード、キャッチフレーズが表に出てくるような形のものをつくれるのであれば、エッジをきかせられると思う。それはやはり基本理念。最

後の「想定する取組」になってくると、やるべきことが書かれていて、確かにエッジがきいてこないと思った。

それから、私はユネスコを相手にアジアの専門家として活動しており、特にグローバル・サウスの問題、そしてポスト・コロナは普段の仕事の中に入っている。確かにそれは大きな問題だと思うが、堺という町の博物館において、収集方針、そして展示の中身についてこの問題を入れていくということになると、まずは博物館職員の意識改革とトレーニングから始まる。職員のトレーニングは活動方針には入っていないが、当然これからの博物館運営の中でやっていかれると思っている。世界で何が考えられているのか、あるいは日本史・堺の歴史を世界の歴史の中に組み込んでいくためには、どういう姿勢でいくのかということは重要な問題だと思う。百舌鳥・古市古墳群の世界遺産推薦の時には、日本史の中で捉えるというよりはアジアの中の国際的な枠組みの中で捉えるという方針、そういう意識で推薦書を書くわけだが、そのために必要だったのは関係する方々の意識改革であったことを私は覚えている。そういう意味で言うと、博物館職員の方々がこの問題をどう考えているかということが、今後の収集方針と展示の解説文の書き方に反映されていくことであろうと思った。

質問だが、アウトプットとして資料2を出すとする、資料1はどのように使われるのか、この先この構想を実現するための具体的な人員確保や予算確保に入っていきかと思うが、資料1をどう使われるかについて教えてほしい。

(事務局) 資料1につきましては、懇話会の構成員の皆様から頂戴するご意見を受け入れるにあたり、構成員の皆様にもわかりやすく理解していただくため、階層構造としての資料をつくった。資料2を文章化する形で基本構想案を今後つくっていきたいと考えているが、資料1で示したものを改変する形でつけていくと考えている。

(稲葉) わかりました。ありがとうございます。

(藪田) 私から2つほど。1つは、基本理念4、5はこの博物館の問題だけではなく、都市全体が抱えている問題でもあるので、博物館から提案しなくてはならないということはないと思う。総合計画を作成する部局などで、これからの堺をどうするかは常に議論しているわけなので、それを受けた上でソフトランディングする形で博物館固有の問題を考える、そういうスタンスを取られた方がよいのではないか。この議論が一人歩きされるのはかなり窮屈だと思うし、正確性を欠く可能性や見落とすことがあると思う。ポスト・コロナの問題のように、現代の博物館、世界の博物館で非常に大きな問題になっていることは別だが、それ以外はもう書き込まなくて、堺の何々計画参照とか、そういう書き方もいいのではないかと思う。

それからもう1つ、私の全体の印象でいうと、基本理念の1と2にミュシャが出てくることにあんまり感心しない。ミュシャが堺にあるという意味をこれから研究すべきなのであって、堺に絶対来るべきものとして来たわけではない。来た以上、それをどう生かしていくかということを考えるべきで

あって、それは歴史文化遺産であることは確かだが、「ここに来れば堺がわかる」という知の集積ではないと思う。むしろそれよりも入れるべきは、やはり堺環濠都市遺跡。堺環濠都市遺跡という日本にしかないような遺物がたくさん出てくるところが中世の堺を代表している、仁徳天皇陵古墳と並んでいるとかを文章化しておかないと。中世の堺を今知ることというのは、堺環濠都市遺跡でなければいけないわけで、その迫力はすごいものがあると思う。だからその辺を基本理念1で、もうちょっときちんと入れていただく、キャッチフレーズにさせていただく方が、これまでの堺の博物館や文化財行政がやってこられたことへの評価として大事ではないかなと思う。これは感想としてお聞きいただければと思う。

(藤野) 付け足したが、基本理念3のところは、私がこの間ずっと使ってきた言葉で言えば「様々な文化施設や文化活動をつなげることによって文化的コモンズをつくっていこう」ということになると思うが、その文化的コモンズの拠点としてパフォーミングアーツであればフェニーチェ堺がある。新しいミュージアムというのはそれと匹敵するくらい大きな意義を持つと思われ、この2つが堺の文化的コモンズをつくる2大拠点になっていくであろう。したがって、この2つの拠点がまず連携する必要があると思う。活動方針の(6)、(7)、(8)は、これからやっていかなければいけない重要な仕事だと思うが、人がいないという問題に直面してしまう。(6)、(7)、(8)の目的を達成するために、既存の学芸員に加え、エドゥケーターやコーディネーターを育成する、専門人材を確保する、というぐらいのことを、(9)として入れておくべきだと思う。そうしないと、基本計画をつくる時に、どういう組織運営をするのか人員配置をするのか、というようなことの根拠が薄くなってしまふ。フェニーチェの方では、そういった人材が確保されつつあるので、そことしっかり手を結んでやっていくということになるかと思う。

(2) (仮称)堺ミュージアム(案)全体の確認

(事務局) 資料2「(仮称)堺ミュージアム基本構想(案)」説明

(藪田) この業務は学芸員が中心だが、学芸員をどの程度の幅で考えられておられているのか、あるいは市民参加あるいは委託という事業もあると思うが、この「誰がどうするか」ということについて、それほど文章化することはないと思うが想定はあるか。

(事務局) 想定する取組に示している部分については、基本的には学芸員が担っていく業務として考えていかなければならず、そこにエドゥケーターやコーディネーター、また地域連携というところを考えている。今後運営形態を考えていく中で、これまでの学芸員とは違う技術を持った方々をどう入れていくかについて検討していく必要があると考えている。現在もご活躍いただいているボランティアの方々にもご協力をこれまで以上に求め、一緒にミュージアムを運営していくという視点も必要になってくるだろう。どのように組織に位置づけていくかは、基本計画を考えていく際に具体的な検討を

していきたいと考えている。

(和泉) 「9 想定する取組」を見ると、組織が大丈夫かなと思う。「8 堺市の文化施設を取り巻く課題」で、堺市博物館の課題もまとめられているが、人の問題についてどこまで書くのか、事務局の都合の良いようにお書きになればいいと思うが、「想定する取組」までの課題として基本方針の段階では簡単にあげておき、それを踏まえて、基礎実践のアクションにつながっていくところになるのではないかなという印象を受けた。

(大澤) 博物館の現場にいるので、どうしても人とか体制とかが気になる。今もご意見が出ていたかと思うが、学芸員の抱えている業務の内容、種類は、すごく幅が広がっていて、博物館法での収集や保管だけではとどまらないものがかかなり多くなっているのは、堺市博物館の皆さんはよくご存知だと思う。そのため、実際にこういった形で構想が固まってくると、具体的にどういう業務が発生するのか、かなり突き詰めて考えていただく必要があると思う。いつこれができるのかという問題も関わってくるが、やはり博物館が担うべき役割というのが全体的に広がっていくという傾向にあると思うので、それにどのように対応していくのかという見通しも合わせて持っておく必要があろうかと思う。オープンした時が完成形じゃないということをしっかり頭に叩き込んでおいて、文章にもあったと思うが、見直して書いていけるということも、現場と設置者側でしっかり握っておかないと。形ができたからお終いみたいなことになるのは非常に大変なこと。今後の作業になってくるかと思うが、十分にご注意いただきたい。

(國賀) 「1 基本構想の策定にあたって」のところ、「ミュシャ作品をはじめとした本市のコレクションや文化財」、こういう表現は他にもあると思うが、堺市のコレクション、文化財の代表がミュシャと取らざるを得ない表現が随所に出てきていることに違和感がある。

それと関連して、「8 堺市の文化施設を取り巻く課題」で問題をいくつか挙げられているが、今回堺ミュージアムとして新しい館が建つということで、利晶の杜を今後どう考えられるのかが非常に気になっている。利休も晶子も、堺を代表する芸術であり、文化を構築した方々だと思うが、新しく堺ミュージアムが機能し始めたところで、堺市の文化として利休と晶子の位置づけを、新ミュージアムがどう考えていかれるのか深く気になっている。

◆堺 アルフォンス・ミュシャ館及びその他の課題の検討の方向性で「分散する収蔵資料の集約について、ヒストリックカーや美術作品、埋蔵文化財、文化財資料等の活用内容に応じて収蔵方法の検討を行う」とあるが、そこでどういう方針を策定されるか、それが展示施設、収蔵施設、そして今話になっている陣容の問題、全てに関わってくると思われるので、堺ミュージアムの収蔵方針 = その他の既存の館の今後の在り方、そこをしっかりと議論していただきたいということが一つ。

あと「10 堺ミュージアムの機能を実現する施設・設備」のところ、「公開承認施設をめざす」と書かれている。これをめざされる以上、切り捨てなければいけない部分もたくさん出てくるので、そ

こへの潔さも必要だと思う。これは今後への私の見解で、蛇足かもしれないが、公開承認施設をめざすのであれば、公開承認施設を設計した経験のある事業者の基本設計、実施設計をお願いすべきだと思う。経験のないところだと非常に大変でリスクだと思うので、実績のあるところでお考えいただくのが一番安全と考える。

(佐藤) 課題は 8 番目に記載されているが、理念があり方針があり、ここの議論がかなり煮詰まった後で課題が出てきて、最後に活動が出てくるという、一回煮詰まった後で戻って、また具体的な対策に出る、この流れでは読みにくいと思う。

10 番の施設・設備について、ここはこれから具体化されていく段階でフェーズが変わると思うが、◆観光・集客エリアのところはショップとかレストランだけでなく、集客やあるいは観光客のことを考えると周遊拠点として動線を必ず入れていく必要がある。例えばバス停や駐車場などは必須で、他の施設との連携が図りやすい施設・設備が必要だと思う。また◆市民の参画・交流機能のところでは、おそらくスペースみたいなものがイメージされ、◆ボランティア利用エリアについても、ボランティアの活動拠点となる機能が必要になるという解釈で、ここには情報発信に対する機能は書かれていない。やっぱり堺ミュージアムを象徴する発信機能、象徴的なモニュメントや画像、看板でもいいので、何か堺ミュージアムはこれというアイコンが必要だと記載したい。

これは蛇足かもしれないが、現代的な課題に対する機能として、◆管理・その他機能のところに職員の方が快適に仕事をできる設備というの、雇用される人の環境を重視するという意味で必要かと思う。

(藤野) 前回に引き続き、ミュシャの問題が引っかかっている。非常に単純化すれば、美術史の文脈の中にミュシャを位置づけていかないと、ミュシャだけ単独で出てくるのは、やはりどうしても違和感がある。ヨーロッパのミュージアムのルーツを探ると、18 世紀の後半くらいからファインアート、美術作品というものが発達してきて、いわゆる特権化されていくことになる。特権化といっても背景は単純でなく、王朝や帝国主義段階におけるコレクションというのは、その権威と正当性を裏付ける重要な表象だったと思う。王朝あるいは帝国の権威として、空間的に世界を支配しているということ、を人民に視覚化して見せつける役割がミュージアムにはあった。他方、王権の正統性としては、空間よりも歴史的な側面の方が強くなる。神話から歴史の時代にどのように接続しているかを考えると、堺の位置は微妙なところがある。天皇制と深く関係するであろう古墳群が隣接している地域で、空間的に世界とつながりを持っていると同時に、歴史軸においてはやはり天皇制の問題とも絡んでくる地域だと思う。

近代に入って、イギリスの場合はフランシス・ベーコンとか出てきて、科学的なもの、客観性を重視して、ミュージアムの改革に取り組むわけだが、そういった中で大英博物館などが出てくる。大英博物館はそこにいけば世界の全てがわかるという形になっていて、自分たちは世界を支配している大きな帝国であるということ、イギリス人だけでなく世界中の人々に見せる場でもあったから、いま

だに無料。もう一つ、フランスのルーブルは美術館として認識されているが、これはブルボン王朝の権威を視覚化する、そしてフランス国民を支配・統治する非常に大きなインストゥルメントとして使われてきたと私は思っている。

堺が寄贈を受けたミュシャはどのような位置付けで捉えたらいいのかということ、簡単に答えは出ないが、こうした歴史的、世界史的なパースペクティブも踏まえた上で、一つの美術史の文脈をつくってその中に埋め込んでいく必要がある。かといって、500年600年前に遡って日本が帝国主義国家として世界中から美術品を略奪するなんてことはできるわけではないので、バーチャルに頼るしかない。デジタル技術を使う中で、世界の博物館あるいは美術史の流れというのは、このようになっていて、その中に1点豪華というか、堺が世界の中でも所蔵をしている非常に重要なコレクションとしてミュシャがある、という説明をしていく。自慢するのではなく反省も含めて、そういった位置づけをするほかないだろう。

(稲葉) この基本構想は、(仮称)堺ミュージアム検討会議と堺市文化観光局の責任になっているが、この堺ミュージアム検討会議というのは何のことか理解しておきたい。

次に、ミュシャの件だが、2つの既存の博物館を統合するので、アルフォンス・ミュシャの文言が3.活動方針のところになければならないことは理解する。しかし、ミュシャの作品を今後も新規で収集していくのか、それは既存のミュシャ展示施設に購入費用があったか、それがそのまま移動するのかということに関係していると思う。活動方針(3)に「ミュシャ・コレクションをはじめとする美術資料を一元管理する」とあり、堺の新しいミュージアムがこの2つの資料を収集するということの説明は一応これでつくが、(1)の「堺、南大阪における歴史・文化及びアルフォンス・ミュシャ作品等の収集を行い」と、今後も新規で収集していくことを思わせる文言が、既存の予算を考慮しているのか伺いたい。今までの議論を聞いていると(3)に記載があればいいのではないかと思うため、(1)になければならない理由を伺いたい。

それからもう一つ、5堺市の概要、6社会環境の変化、7堺市博物館・堺市文化館の沿革、と構想をまとめるにあたっての全体の基本データが3活動方針と、9想定する取組の間に挟まれている。読む側からすると、結論のようなものである活動方針を読んだ後に、想定する取組が出てくると、どっちを参照するのか、ターゲットグループはどこにあって、誰にどう聞かせたいのかと思う。この構想案が出た後、例えば予算とか組織体制の整備に関して、常に参照するものが9想定する取組なのか3活動方針なのかかわかりにくいと思ってこの構想案を見ていた。

(事務局) 資料2の表紙について、最終的な成案は堺市でつくったことになると思うが、現在の資料は、堺市文化観光局と部・課を横断して職員が集まった(仮称)堺ミュージアム検討会議で叩き台を出しているということで、その2つの名前を記している。

先ほどから、各先生方からミュシャの入れ込み方に違和感があるというご意見をいただいた。藤野構成員からいただいた案等を含め、堺の通史の一連の流れの中で、ミュシャをどう入れ込むのが適切

かということはこれから考えたい。また稲葉構成員から、収集に関する予算的なものをお伺いいただいたが、土居コレクションでは、ポスト・コロニアルなどそういった収集履歴は問題ないと考えている。「アルフォンス・ミュシャ館及びその他の課題」で記載しているが、倉庫部分が狭隘でかつ分散している非常に難しい施設であり、これまで表立って予算を持って購入というのはしていない。ただ、どういった規模の建物になるかというところはあるが、ミュシャのコレクションについても予算化をした上で、新しい建物にふさわしい収集方針を立てていきたい。

課題が 8 番目に来るのは、立ち戻ってしまうというご意見、市の概要などが間に挟まっているのは見づらい、というご意見も頂戴した。どのような順番が読みやすく理解しやすいか、文章立てを行う際に検討させていただく。

それから、これを最終的に誰が見ていくのかということところだが、基本理念と活動方針については、堺ミュージアムに関わる人間が常に立ち止まって、立ち戻って参照するのが基本理念と活動方針であると考えている。想定する取組については、これから基本計画をつくっていく際に、基本構想でどのような取組を想定していたのかを振り返ることが必要になってくると考えている。

それから、藪田座長から社会的課題の解決とかをミュージアムだけで考えるのは窮屈ではないか、というご意見も頂戴したが、博物館のあり方の答申等によると、収蔵する資料に基づいて社会的課題を解決していく、というような文章もあったので、堺ミュージアムができた後どのような課題に向き合っていくのかを考える意味でも、参照するものと考えている。ミュージアムができて運用していく中では、時代的に少し遅れてきて、参照しなくてもよいものが出てくるかもしれないが、今後、基本計画を進めて考えていく中では、このようなことを念頭に事業・取組を考えていきたい。

(稲葉) ③活動方針(1)のアルフォンス・ミュシャという文言は、今後資料収集の予算の確保を考えているということで理解をしたが、(1)は今後収集していく資料の話であるので、もう少しオブラートに包んだ言い方もあるだろう。ここで固有名詞を出すのかどうかということを感じた。もう少し広く、近現代の資料、という感じで、これからの堺ミュージアムが育っていく方向を見渡した文言の書き方があるだろうと思う。

次に項目の順番については、考える課題を先にあげて、そこからどう取り組んでいくかということでもいいが、活動方針と想定する取組は両方とも文量が多いので、並べるとこの2つの関係は何だろうかと戸惑うかもしれない。そこを考えていただければと思う。順番を改めて考える際には、活動方針があれだけ長いと取組でいいようなものもあり、一体どっちが大事なのか考えていただければ。

(藪田) 9 想定する取組の冒頭に「博物館活動を活性化する調査研究」を挙げていただき、位置づけは適正かと思う。しかしながら、その「向き合うべき現代的課題」として⑤適切なマネジメントに向けた博物館評価制度の導入というのがあり、それを受けた冒頭の1つ目に「学芸員個々の専門性の強化」とあるが、大事なものは専門性でなく全体の博物館としての役割を享受すること。「専門性」だけが書いてあると、全体は誰が面倒を見るのかわからない。そういうことを考えれば、マネジメント評価と

いう博物館教育活動とかそういうものを受けた上で、最後にフィードバックするというところを入れていただくとどうかと思う。学芸員も含め、全体としての博物館の役割、課題、今後の方向性について議論するというのも、文言として入れていただくと起承転結の「結」になるのではないか。

これで議論を終息したいと思うが、よろしいか。では、長時間にわたりありがとうございました。

(事務局) 構成員の皆様、本日は長時間にわたり貴重なご意見を賜り、本当にありがとうございました。いただいたご意見を事務局で整理の上、庁内で協議し、より良い構想となるよう、検討を進めていく。これまで4回の懇話会で頂戴したご意見を参考に、今後事務局で十分に内容を整理の上、構想案に反映させるよう努める。事務局で成案化した構想案は、構成員の皆様にご提示させていただく。その後のスケジュールについては、次年度、令和8年度の早い段階にパブリックコメントを行って、市民の皆様にご覧いただき公表する。そこで寄せられたご意見を考慮して、最終決定するための手続きを行った後、正式な基本構想を策定するという予定になっている。4回にわたる懇話会においては、構成員の皆様には貴重なご意見、ご助言を賜りまして誠にありがとうございました。深く御礼申し上げます。

(須藤) 須藤館長挨拶

(事務局) それではこれをもちまして、第4回(仮称)堺ミュージアム基本構想検討懇話会を閉会する。誠にありがとうございました。